

令和元年6月26日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21220

研究課題名(和文)大学生ピアサポーターを活用した発達障害学生に対する就労支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Research on carrier support programs for college students with Autism Spectrum Disorder

研究代表者

面高 有作 (Omodaka, Yusaku)

九州大学・キャンパスライフ・健康支援センター・助教

研究者番号：80749474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：高等教育機関に在籍する発達障害学生が増加している中、就労支援の知見の蓄積が十分でないことから、ICF(国際生活機能分類)の視点にたった、発達障害学生へのキャリア支援に関する研究をすすめた。その結果、(1)知識の深化に加えインターンシップなどの体験に基づいた学びが自己理解を深めること、(2)ピアとしての活動が自己理解とセルフアドボカシースキルを高めることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、障害が個人にあると考えるいわゆる「医療モデル」ではなく、個人要因と環境要因、機能障害の相互性の結果、活動制限や参加制約が生じるといった生活機能の視点に立った「統合モデル」から発達障害のある大学生の就労支援を検討した。自閉スペクトラム症者の中核的な障害と関連する、柔軟な思考の持ちづらさや見通しの立てづらさに顕著な変化は見られなかったものの、就職に向けた自己効力感やセルフアドボカシーが向上した。今回の研究より、心身の機能障害のみを治療やリハビリテーション、トレーニングなどのターゲットとするのではなく、環境要因を調整することで能力の発揮や社会参加が可能になることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Students with Autism Spectrum Disorder are increasing at a university. however, a study of the carrier support is insufficient now. Therefore we studied the carrier support for the developmentally disabled students who took a viewpoint of ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health).

As a result, it was suggested that, (1) Learning based on an experience of the internship leads to deepening of the self-understanding. (2) Peer support activity raises self-understanding and self-Advocacy skill.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自閉スペクトラム症 就労支援 大学 セルフアドボカシー 自己理解 ピアサポーター

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

障害者の権利に関する条約の寄託、障害者差別解消法の成立などの法整備を背景に、高等教育機関における障害学生支援体制の構築が進みつつある。特に、国立大学においては、障害のある学生(以下、障害学生)への合理的配慮が義務化(平成28年4月より)された。合理的配慮は、従来の医療モデルとは異なり、「社会モデル」の考え方に立つ(「障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針」)。「社会モデル」では、問題(参加の制約)の原因を、個人ではなく、障害者のニーズを考慮した十分なサービスを提供できていない、社会にあるとする(Oliver, 1996)。

日本学生支援機構の平成26年度の調査によると、障害学生のなかでも、発達障害のある学生(以下、発達障害学生)の増加が顕著であり、発達障害学生の修学支援に関する知見の蓄積は進みつつある(例えば、斎藤ら, 2010; 日本学生支援機構, 2015等)。一方で、大学における就労支援に関しては、いくつかの実践報告があるが、その多くが発達障害学生が何らかの技術(スキル)を習得することを目的とした、従来の「医療モデル」に近い実践が多くを占める。一方で、発達障害学生の身近な支援者となりうる、ピアサポーター学生(以下、支援学生)を活用した、「社会モデル」に立った就労支援の実践報告は見あたらない。

精神科医療の領域において、対人コミュニケーションが苦手な自閉スペクトラム症者に、就労支援を実践した研究(面高, 2014)では、生活場面や就労場面にいる人が重要な環境因子となり、本人の生活リズムの安定や仕事の継続に大きな影響を与えていることが示唆され、社会モデルの視点を含む生活機能の概念を用いた支援の検討が有効であると考えられた。生活機能の視点とは、「国際生活機能分類(ICF)」にもとづく障害のとらえ方であり、従来の「機能障害 能力障害 社会的不利」(障害があるから、できないことがあり、できないことがあるから社会的に不利になる考え方)の枠組みをもとにした、職業的な問題や不利といった視点(医療モデル)をこえて、統合的かつ中立的な理解につながる視点(統合モデル)である。就労支援においては、本人の特性を含めた個人因子と、大学環境や周囲のサポート体制などの環境因子との相互的な影響を考慮する必要があり、生活機能の視点に立った支援の検討が求められると考える。

2. 研究の目的

大学生生活における重要な環境因子である支援学生の障害についての知識的な理解(知識的理解)と、経験をもとにした理解(体験的理解)とが、就労支援場面における合理的配慮に関する、意識と行動に与える影響についての調査し、大学における発達障害学生の就労支援体制構築の一助となる研究をおこなう。また、生活機能の視点に立った当事者支援と支援者支援のあり方について検討し、統合モデルに立った就労支援プログラムの開発を本研究の目的とする。

本研究では支援学生の障害についての知識と経験が、発達障害学生への合理的配慮(「障害者が他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう」(障害者の権利に関する条約))につながる、意識や行動に与える影響について明らかにし、発達障害学生の就労支援体制の構築に寄与する研究を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 大学生の障害についての知識と経験が合理的配慮に関する意識と行動に与える影響の解析

本研究では、大学生の障害に関する、知識的な理解と経験に基づく理解の高低が合理的配慮についての意識と行動にどのような影響を与えるのかを調べる。

研究 : 合理的配慮に関する大学生の意識調査

国立大学では法整備を背景に、合理的配慮の提供が義務化されるが、大学で合理的配慮に関する大学生の意識や行動の実態を把握するための基礎的なデータが不足している。そこで、今後の支援学生支援の根拠となる、合理的配慮についての大学生の意識と行動を調査した。大学での生活・学習場面で生じるであろう障害のある学生の、活動と参加が阻害される状況を記述し、選択形式で意識と行動を解析した。なお、アンケート作成にあたっては、申請者が調査チームのメンバーであった、平成26年7月に実施した、「バリアフリーについての意識調査」(対象: 大学生約3000名)を参考にした。

(2) 発達障害学生の就労をサポートする支援学生の支援

研究 : 就労ピアサポートプログラムの実施

発達障害がありすでに学内のキャリア支援プログラムに参加経験のある学生を支援学生として、就労ピアサポータープログラムを実施した。プログラムは統合モデルの考え方に基いて構成した。また、心理劇の手法を用いて、体験的に発達障害についての理解を深めるとともに、支援の過程で生じた心理的葛藤を明らかにして、乗り越える援助をおこなった。支援学生が関わったプログラムは、計6セッション(1セッション90分)で構成された。個別の半構造化面接を行って支援学生の変化を質的に分析した(プログラム前・後、2か月後のフォローアップ)。

プ時、計3回)。

(3) 発達障害学生の生活機能に与える支援学生のサポート活動の効果

キャリア教育に関するプログラムにおいて、過去に参加経験のある発達障害学生がメンター的な役割を持つ支援学生(ピアサポーター)となった。3名の支援学生が7名の初めてプログラムに参加する発達障害学生のサポートを行った。

研究 : 発達障害学生の生活機能に与える支援学生によるサポート活動の効果

対象は、X大学に在学しているASDの診断のある学生7名(学部1年生~4年生)。進路選択に関する自己効力感(浦上,1995)と、就職レディネス・チェック(RCC: Readiness Check for Career planning)をプログラム前後に実施した。RCCは「就職意欲度」「環境理解度」「就職活動理解度」「思い込みからの自由度」「キャリアプラン設計度」から構成された。また、プログラム実施後、1ヶ月以内に個別の半構造化面接にて、自己理解の観点から「プログラムにおける気づき」「将来展望」について聴き取った。なお、倫理的配慮として参加者に対して個別に本研究への同意を取得した。

4. 研究成果

研究 では、支援の許容度を障害種別に比較した。その結果、発達障害は視覚・聴覚障害と比べ、学生が主体となって支援することの許容度が低かった。大学側が支援の主体となっていくことが支援の初期には望ましいと考えられた。そこで、当初の研究計画の一部を見直し、大学や教職員が主体となるプログラムのなかにメンター的な役割を有する支援学生を位置づける取り組みに修正した(研究)。

研究 及び研究 を基盤として、研究 を実施した。発達障害学生を対象に、研究 のプログラム前後で進路選択に関する自己効力感に差があるかどうかについて、ウィルコクソンの符号順位検定(Wilcoxon signed rank test)を行ったところ有意差が認められた($Z=-2.20, p<.05$)。また、RCCにおけるプログラム前後の比較を行ったところ、3要因において有意差が認められた(「就職意欲度」 $Z=-2.21, p<.05$;「環境理解度」 $Z=-2.23, p<.05$;「就職活動理解度」 $Z=-2.23, p<.05$)。これらの結果から、プログラムに参加した自閉スペクトラム症のある学生は将来について肯定的な展望を持つようになったこと、就職活動に関する理解が深まったことが窺われた。

個別インタビューにおける代表的な発言を以下に示す。

- ・ ESやグループディスカッションとか。知らなかったことがあった。
- ・ 一番ためになったと思うのは、自己分析...一人でできることには積極性を発揮するけれども、大勢の時には消極的になってしまった。
- ・ グループディスカッションで困ったからイライラした...困っていると早口になって適当な発言になる。(グループワークのある授業でも)そういうことを言ったかも。
- ・ なかなか人と接するのが難しい自分の特性を考えて、分析作業に専念できるというところで、チェックシートの情報に接する仕事が向いているのかなと考えています。

高等教育機関に在籍する発達障害学生が増加している中、就労支援の知見の蓄積が十分でないことから、統合モデル(国際生活機能分類)の視点に立った、発達障害学生へのキャリア支援に関する研究をすすめた。研究 のプログラムの結果より、コミュニケーションの質的な困難さにより周囲からの情報を得にくい自閉スペクトラム症のある学生の就職活動に関する理解を深め、就労に向けた意欲を高めることが明らかになった。また、これらの体験が将来に向けた前向きな展望や、修学・生活面での自らの行動を振り返るきっかけになると考えられた。

既存の就職支援の多くは就職活動を行う学年の学生を中心に展開されている。しかし、自閉スペクトラム症のある学生のように情報と経験が不足しがちな学生にとっては他の学生と同じタイミングで就職活動を始めると「出遅れる」ことが多いと考える。今回の実践より、事前に適切な情報と活用可能な学内外の資源を伝えること、障害特性を考慮した体験的な学びを提供すること、自己理解を深める機会を設けることが必要であると考えられた。

なお、RCCの「思い込みからの自由度」「キャリア設計度」に有意な変化が認められなかったが、これらは自閉スペクトラム症者の障害特性である、多面的かつ柔軟に思考することの難しさや、見通しを立てて物事に取り組むことの苦手さを反映していると考えられる。

研究全体としては、1)知識を深めることに加えインターンシップなどの体験に基づいた学びが発達障害学生の自己理解の深化につながることで、2)ピアとしての活動が自己理解とセルフアドボカシースキルを高めること、が示唆された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

面高有作・横田晋務・甲斐更紗・田中真理、基幹教育における障害学生の現状と課題、基幹教育紀要、査読有、vol.4、2018、123-135

面高有作・遠矢浩一、精神科医療における就労支援のあり方に関する考察-心身機能と環境

因子の相互性をふまえた支援、九州大学総合臨床心理研究、査読有、第8巻、2017、107-118
甲斐更紗・面高有作・田中真理、アクセシビリティ支援を担うピア・サポーター学生の学
びのプロセス―知的理解の観点からみた「障害」の意識変容―、基幹教育紀要、査読有、
vol.4、2018、23-41

小田真二・面高有作、地域インクルージョン研究所（米国・ボストン）での研修から本邦
の障害学生支援について考える―「セルフ・アドボカシー」と「修学のためのユニバーサル・
デザイン」に注目して―、九州大学キャンパスライフ健康支援センター学生相談室紀要、3
巻、2017、47-54

面高有作・遠矢浩一、自閉スペクトラム症のある成人に対する社会生活適応にむけた精神
科デイケアの実践、特殊教育学研究、査読有、第54巻5号、2017、317-326

〔学会発表〕(計 10件)

面高有作・加来春日・丸山徹、九州大学におけるコーディネート機能を有する部門の取り
組みと意義について、第56回全国大学保健管理研究集会、2018年

面高有作・船越高樹・桶谷文哲・西村優紀美、大学における発達障害学生へのキャリア支
援-自己理解の深化とセルフアドボカシースキルの獲得に向けた支援の実施報告から―、日
本特殊教育学会第56回大会(企画者)、2018年

面高有作・桶谷文哲・高橋知音・山田豊・佐藤剛介・井戸智子・南和子・番園寛也・Heike
Boeltzig-Brown、日本財団プログラム「平成29年度・障害学生支援に係るリーダー育成研
修」報告会、全国高等教育障害学生支援協議会第4回大会(企画者・司会者)2018年

面高有作・田中真理、自閉スペクトラム症のある学生への就労支援プログラム-自己理解を
含む社会移行の準備性に焦点を当てた取り組み―、日本特殊教育学会第55回大会、2017年
面高有作、発達障害学生支援への学生サポーター導入の可能性と限界-学生サポーターによ
る修学支援における身体障害と発達障害の共通性と差異性について―、日本特殊教育学会第
55回大会(シンポジスト)、2017年

面高有作・小田真二、九州大学のUniversal Accessの実現に向けて-Moodleのユニバーサ
ルデザイン化の実践から―、全国高等教育障害学生支援協議会第3回大会(シンポジスト)、
2017年

面高有作・田島晶子・田中真理、発達障害のある学生を対象とした就労支援プログラムの
実践、全国高等教育障害学生支援協議会第3回大会、2017年

面高有作・横田晋務・田中真理・平嶋沙也花・松崎泰・甲斐更紗・西館有沙・菊池哲平、
発達障害学生支援における学生サポーター育成、日本特殊教育学会第54回大会(自主シン
ポジウム企画者)、2016年

面高有作・甲斐更紗・田中真理、障害学生支援を担うピア・サポーター学生の「障害」意
識変容―知的理解の観点から―、日本特殊教育学会第54回大会、2016年

面高有作・甲斐更紗・田中真理、「連携」からみた大学における障害者支援―九州大学に
おける実践と課題―、九州地区大学研究協議会、障害学生支援部会、2016年

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等につ
いては、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。